

伊達家関連史料に見る伊達政宗の三重臣らの出奔

D 版

2018.6 佐藤正喜

2024.1. 13 修正補筆

■政宗関連の時代小説に政宗の三重臣の出奔が取り上げられている。

史実からヒントを得たものであれば史料ではどのように触れているのか、或は全くのフィクションなのかを調べてみた。主な参考資料と引用については文末に記した。

●茂庭綱元の出奔

山城国に住んでいた茂庭氏の祖・実盛の後裔・実良は奥州へ移住し、伊達家初代の朝宗に仕え、伊達郡茂庭村を領して鬼庭と称した。代々伊達家の重臣として戦国時代、鬼庭周防良直の嫡男として生まれ、天正 14 年、38 才で政宗公より奉行職(家老)を命ぜられ、この時より石見綱元と称した。政宗公の三重臣として「智」の片倉景綱、「武」の伊達成実とともに「吏」の茂庭綱元と称せられた。別名「政宗の官房長官」といわれ、文武にすぐれ、国家老として民生を初めとする行政官で、戦陣では外交・渉外、兵站に能力を発揮した。

○茂庭綱元の出奔理由は、じつに馬鹿馬鹿しいものであった。出典は記述されていないが、次の物語風の記事を見つけた。

“主君が朝鮮にある時、彼は太閤に呼び出され賭け碁をし、彼が負ければ太閤の家臣となり、勝てば太閤の寵姫を賜ることとなった。

「いくら何でもそのようなことは……」、綱元はひきつって再三辞退したが、太閤もしつこい。やむなくこれに乗ることとなる。この決して負けられぬ勝負に、綱元は見事勝った。彼は安堵の息をひそかにもらしつつ、その場を去ろうとした。

だが太閤は一度言い出したことだと彼をひきとめ、女を選ぶようしつこく迫ってくる。綱元はもともと地味な女を選ぼうとした。彼は着飾った女ではなく、掃除婦まがいの格好をした、埃にまみれた女を指した。するとその刹那、太閤は困ったような顔をしている。

「ええ目のつけどころじゃな、よりによってこやつとはのう」

太閤は観念し、その女の頭巾を払い顔を袖で拭った。すると現れたのは光り輝くような美女、香の前ことお種である。太閤はこの女の美貌をことのほか気に入っていた。

綱元は彼女を見ると言葉を失い、あわてて別の女を指したがもはや遅い。

「何を遠慮する、女のひとりやふたりくれてやれぬことがあるか。さあ、たっぷり味わうがええ」

香の前も、貧相な太閤よりもこの精悍な男を好んだのだろうか。どんな男でも鉄心をとろけさせるような、愛嬌たっぷりの笑みをうかべた。やむなく綱元は彼女を受け取る羽目となる。

朝鮮出兵から戻った政宗がこの珍事を耳にし、みるみるうちに顔をひきつらせた。以前から太閤は綱元を気に入り、しきりと懐柔していた。その彼がいよいよ女の色香で陥落したかと勘違いし政宗は怒りくるったのである。

「綱元の糞たれめが、太閤の策にかかって鼻の下を伸ばしおったか。おのれ、ただで済むと思うなよ！」

彼のこの激昂のつぶやきは、めぐりめぐって綱元の耳に届いた。こうして彼はその後出奔することとなったのである。

のちに伊達家にもどった綱元がまずしたことは、主君政宗に香の前をさしだすことであった。政宗は早速この美女と閨をともにし、彼女が孕むと綱元にもどした。“…筆者注記；綱元と香の前との子として育てた娘は、長じて家格着座の原田甲斐宗資に嫁して甲斐宗輔を産んだ。

○『貞山公治家記録』には出奔扱いの記事はなく、文禄4年隠居記事としてある。

“此の年、奉行茂庭石見綱元 46 才、**隠居**仰せ付けられ、嫡子主水良綱に家督仰せ付け”

○『茂庭家文書』の「綱元君記」には、いわゆる“出奔”の引き金を匂わせる記事がある。

文禄元年(1592) 44 才

鬼庭というは卑しい苗字なので改めるべきの旨の(太閤殿下の)上意あり、**鬼庭村**の本名を以て、**茂庭**と改めた。政宗公の京都出陣に当たり綱元は御供した。筑前国博多浦に御着、此後、肥前国名護屋に御着陣、綱元は名護屋御留守居を仰せ付けられ此地に留った。在陣中は太閤殿下の陣屋に政宗公ともども招かれ、御料理の御相伴を仰せ付けられた。其後は、御茶事等の節に召出され、御相伴を命ぜられたという。

文禄三年 46 才

太閤殿下より綱元へ御妾一人を賜わった。殿下の16人の御寵愛の一人で、名は種(お種又は香の前)、歳は18、伏見町に居住の侍、高田次郎右衛門某の娘で、是後又次郎**宗根**を生む。

文禄四年 47 才

4 月 政宗公伏見より岩手山(後の岩出山)へ一時帰国を許され、綱元もお供した。

○『伊達世臣家譜』一族 茂庭の項

文禄元年 朝鮮之役 公岩手山を発ち京都に到る 綱元之に従う。太閤 綱元に鬼庭と名乗る所以^{いわれ}を問い、綱元鬼庭村の本名を以て茂庭と改めると復命した。綱元 公の命に奉じて名護屋留守居として留まり、度々太閤に謁見す。此の時、伏見に居宅を賜わるが綱元固辞して受取らず。秀吉愛妾 16 人あり、その一人を綱元賜る。高田次郎右衛門の娘で、後に亙理伯耆**宗根**^{わたりほうきむねもと}を生んだ者なり。

文禄四年 政宗公は使者を遣わし綱元に致仕(隠居のこと)を命じ、かつ、其の子良元(家督の良綱)に、隠居料は 100 石を越えないことに加えて、若し超えれば良綱が相続した茂庭氏の本領 5,000 石を没収すると命じた。更に公は綱元の伏見居住を望む旨を伝えた。わずか 100 石の隠居料では暮らせないとして、綱元は香の前を伴い伏見へ赴いた。その途中、江戸に立ち寄り、本多佐渡守正信に拝謁し馬を一匹献上した。徳川家臣になれと誘いを受けたが固辞した。家康からは、関八州伝馬 10 疋の朱印状と永楽銭 200 貫文を餞別に賜う。また、道中行装具として中白鳥毛槍、虎皮の鞍覆い、紫縮緬の手綱を戴く。

慶長二年 太閤殿下から公に対して茂庭石見が久しく見えないがとの御下問があり、公はよう

やく譴怒を解き石見綱元は帰参を許され、旧に復した。

★綱元出奔の理由など

①綱元の出奔には、政宗近臣の讒言もあったようだが、政宗不在の折で秀吉への傾斜を見せる綱元の姿勢が政宗には許せなかったのであろう。しかも、天下の美女といわれる「香の前」を拝領したことへの政宗の男の嫉妬もあったとする説もある。伊達家に帰参した綱元は早速に香の前を政宗に献上し、これを喜んだ政宗は香の前に一男一女を生ませている。

②出奔ではなく作戦だったとする筆者佐藤の見解

綱元の人柄、手腕を買っている政宗が、家臣の噂或いは誹謗中傷に惑わされたとは考えにくく、中央情勢を探るために綱元の伏見滞在の理由をこしらえたものと思われる。百石では生活できぬとした綱元が、香の前の故郷とはいえ田舎を出て伏見に移り隠居するとは考え難いことで、戦略的な意図をもつての隠居・伏見転居命令であったろうと考えると腑に落ちる。

このように考える理由を『伊達世臣家譜』に探る。

・文禄四年4月、肥前名護屋に向けて岩出山を出国以来ほぼ3年半ぶりに、政宗公に従い帰国した夏のこと、「突然の隠居を申し渡すのに城中でなく使者を遣わして命じていること」は不自然であり、

・「隠居料に上限を設け、且つ、それを超えたら茂庭氏の全知行を没収すること」は、非常に理不尽な命令である。

・おまけに、隠居命令に「伏見居住」を匂わせていること。

・・・茂庭側の史料を元に編纂された『伊達世臣家譜』の記述にこれらのニュアンスが読める。即ち、公の朝鮮役での不在中、秀吉と懇意になり過ぎ、許しを得ずに茂庭姓に改めたり、秀吉の愛妾を拝領したりしたことを、表では譴怒しているが、裏の気持ちを汲んで伏見に赴き隠居の風を装って、「事前に打ち合わせた例のあの作戦にかかれ」といった意味が隠されていると考えるのは行き過ぎであろうか。根拠は下の枠内の二点。

「蓋 公此時欲_レ使_レ綱元居_二干伏見_一、而於_レ義不可也、於_レ是公陽為_レ加_二譴怒_一、陰諷_二微意_一」 ⇒解釈すると

① 公 陽為_レ加_二譴怒_一＝公は表向きには譴責している。

② 陰諷_二微意_一＝裏では公の遠まわしに微意(気持ち)を伝えている。

なお、伏見に赴く途中で江戸城にて家康に挨拶し、家臣にとの誘いを断り、餞別の数々とともに家康から賜った「中白鳥毛槍」は現存する。

昭和48年、松山町から文化財指定を受けている。



●伊達成実の出奔

政宗公の祖父・晴宗の弟である実元の子で、永禄11年生まれで政宗の一歳年少。年少の頃より武勇に優れ、人取り橋の合戦(天正13年;蘆名、二本松、佐竹氏ら連合軍との戦)、摺上原^{すりあげはら}の合戦(天正17年;蘆名氏滅亡)などに大功があり、天正14年には19才

で二本松城主となり、この頃より父・実元から家督を継いでいる。

文禄の朝鮮の役から帰国してからは伏見の屋敷に在り、文禄4年、6月には領地の角田から呼び寄せた妻女・玄ノ方を持病で失い(享年 23)、7 月には関白・秀次と昵懇にしていた政宗にも謀反の嫌疑が掛けられ伊達家が騒然としていた時期、伊達一門内での地位、所領をめぐる政宗公との行き違いがあった。この頃、一門・一家・家老の妻子を伏見へ呼び寄せ在府させるよう沙汰があり、伏見留守居を仰せつかった成実の屋敷にも、入りきれない重臣の妻子が身を寄せていた。伏見屋敷での生活は武人として一層寂寥感のある中での出奔だったようだ。

○小説『伊達成実』近衛龍春著、PHP文庫

【出奔当日】文禄4年(1595)、伏見の屋敷。行き先は決めず夜陰に紛れて屋敷を出ると、遊佐佐藤衛門常高が控えており供を請うた。……

【政宗の対応】屋城景頼に命じて角田城の明け渡しをさせた。成実の家臣たちは従ったが、重臣の羽田実景が拒否して自分の屋敷に30人ほどと籠もった。成実は羽田実景に全てを任せていたこともあり、他の白根沢重綱、青木胤綱、石川実光らと意見が合わず、白根沢らは屋城景頼の追手に加わった。羽田実景は奮戦の上で討死、屋敷は炎上した。

【出奔先での生活】高野山で妻子の菩提弔い。噂は伊達家をはじめ各大名に伝わった。太閤秀吉が死去してからは、仕官の誘いに拍車がかかった。片倉景綱自ら足を運び帰参を促した。小田原城主大久保忠隣に遣いが仕官話を持ちかけた。その積もりはないのに、政宗の真意が分かるまで寄食することにし、大久保領内の糟谷(神奈川県伊勢原市)に遊佐常高とともに寄食していた。慶長5年(1600)、家康による会津上杉の討伐宣言の時期に、上杉から5万石の仕官話を丁重に断り、さらに大久保忠隣からの参陣要請も無視して伊達の対応を鶴首して待っていた。

【帰参】こうした中、政宗は同年6月、大坂を出立して帰路に就いた。途中で片倉景綱は伊達軍勢の中から抜けて糟谷を目指し、糟谷の寺で成実に対面した。景綱は成実の鎧兜、太刀を示し政宗公の意を伝えたが、成実、この場では無言。景綱も一言挨拶してあっさり退散。7月、成実は大久保忠隣に従って馬足を進め、2日後、江戸城大手門に到着。

下馬して忠隣に向かい、「ゆえあって伊達家に帰参し、会津攻めに参じ、家康公のお役に立つ所存」……。気落ちしていた成実が伊達家に帰参する気になったのは、鎧櫃を開いた時にある。中に「帰参せよ」と一言書かれた紙にセキレイの花押が印され、目の部分に針の一刺しがされて眼が開かれていた。まさしく本物。見た瞬間成実は胸が熱くなり、えも言われぬ闘志が湧き上がった。……、12日、政宗は北目城(仙台市)に入城、主殿で評議のさなか、成実は堂々と入ってきた。

さて、伊達家の史料では成実の出奔に関してどのように触れているのであろうか。

○『貞山公治家記録』

慶長3年戊戌 政宗公御年32の項

此の年、石川大和守殿昭光^①へ采地200貫文を加増し伊具郡角田に在所替えを仰せ付けられ、志田郡松山より移住された。去る文禄の頃、公、大和守殿嫡子中務殿義宗の奉公の存念に感じ入り采地200貫文を加増し、大和守殿昭光の本知(知行)600貫文が今回の加増

により都合 1000 貫文の禄になり在所替えになったのである。

角田という地は元、伊達藤五郎殿成実の在所であった。是より前、成実は故在り伏見に於いて出奔し、相州小田原の内、糟谷邑に退居した。

或は云う、成実出奔の故は、成実が毎度の戦陣に武功があったにも拘わらず、領内において上野介殿政景^②、大和守殿昭光などと比べて小身であったことを、常々不快に思い(待遇上の不満^③)、且つ、個人的な理由^④もあって、伏見より紀州高野に退いたものであると。

公は桑折点了斎・蟻坂丹波をして二度まで成実を説得したが翻意しなかったので、三度目の使者があった時、成実は家中を角田から退去させるように家老羽田右馬助に命じ、自身も角田に赴いて跡始末をして行方を眩ました。岩出山留守居屋代景頼が公より命じられて家中退去を下知するために角田に赴くと、羽田右馬助は私宅に引き籠り抵抗し、男女 30 余人が討死した。その他の者はそのまま下知に従って奉公し、右馬助に同意の者は皆出奔した。成実出奔の年月は不詳であるが、此の年の事とみえる。角田落居の事も委細は伝わらず。

慶長 5 年庚子 政宗公御年 34 の項

7 月、上杉方の白石城を攻める時節、伊達藤五郎殿成実相州より帰参せられ、お目見え仰せ付けられた。藤五郎殿は先年出奔し相州糟谷邑に退居していたものを、今度、石川昭光・片倉景綱方より内意を申し遣わし帰参したものである。大神君家康より 100 人分の扶持を賜わり、今度、景勝より 5 万石を以って招かれるも、公の敵方に仕えることは本意に非ずと応ぜず、昭光・景綱・伊達上野介殿政景の取り持ちを以って遂に召し返され、(成実一門は解体していたので)先ず浪人分にて昭光の備えに加えられ出陣すると云々。

藤五郎殿、名を兵部と改める。此の前のことか此の後か是れ又知らず。

注)①石川昭光;政宗叔父(輝宗弟)、石川家の養子から政宗の家臣に。伊達一門 1 席。

②留守政景;政宗叔父(昭光兄)、留守家の養子。政宗から伊達の姓を。伊達一門 3 席。

③成実の父は 15 世晴宗の同母弟・実元であり、政景、昭光は 16 世輝宗の同母弟であったが、政宗からすれば政景、昭光は直接の叔父であるから血縁関係は成実より深い。かつ、政景は留守家の当主、昭光は石川家の当主で、麾下に属しているとはいえ、半独立の外様大名的家臣である。政宗としては血縁の深さというより政略的立場から政景、昭光を、身内の重臣である成実より知行を多くしたのであろう。また成実家は伊達一門 2 席になっており、外様家臣の下に置かれることを不愉快に思っていた節がある。

④成実、此の年 31 才、正室玄ノ方との愛娘を角田で亡くしており、文禄 4 年に伏見に呼び寄せた玄ノ方も病気ですぐに亡くして孤独であった。

○『伊達世臣家譜』 一門 2 席 伊達の項

文禄二年朝鮮の役に従う。帰朝して後は伏見邸に在り。文禄四年、成実ゆえありて伏見邸を去り、紀州高野山に退去す。留守政景・石川昭光ら、桑折点了斎・蟻坂丹波を遣わし、再三これを規すれども聞かず。ここにおいて、その重臣・羽田右馬助実景に命じ、成実の家臣に角田を去らしむ。成実すでに所在知れず。ここにおいて公、屋代勘解由兵衛景頼(時に岩出山城代なり)に命じ、成実の家臣に角田を去らしめ、もし命を承らずばこれを討ち取れと命ず。景頼兵を率い、角田に到る。羽田実景私宅に拠りてこれを拒む。死者 30 余人。景頼ついに角田城を収むという。成実後に相州小田原糟谷邑に退去す。

○伊達成実サイドの私家本といわれる『成実記』では、出奔に触れていない。

★成実出奔の時期、理由に諸説あり

まず出奔の日付自体に諸説(文禄4年(1595)秋から慶長3年(1598)まで)があり、出奔先も高野山・相模国糟谷(現在の神奈川県伊勢原市)の両説があり、出奔の理由についても、家中での席次を石川氏に次ぐ第二位とされた上に禄高も少なくされたことへの不満が原因であるとする説、秀次事件への政宗の連座を避けるために嫌疑の内容を自らが被って隠遁したとする説などがある。

慶長5年(1600年)、関ヶ原の戦いが起こると、成実は上杉景勝から禄高5万石で家臣となるよう誘われたが、「本来ならば家臣筋の家に仕えるつもりはない」としてこれを拒絶した。

・・・佐藤注記;上杉家が越後守護職であった頃、上杉定実の娘が伊達13世尚宗の正室になり14世植宗を産んでいる。植宗は成実の祖父に当たり、父・実元はその昔、上杉定実から入嗣を請われていたが頓挫した経緯があり、そのことを「本来ならば家臣筋の家」と云ったのか。

また出奔中に大久保忠隣を介して徳川家康からも誘いを受けたが、政宗の奉公構いにより破談になったという。同年秋、伊達政景・片倉景綱らの説得によって帰参し、7月の白石城攻めにも石川昭光の軍に属して参加したといわれる。

・・・佐藤注記;奉公構いとは、元家臣の出奔・逃避等の際の罰で主家からの追放を意味し、旧主の赦しがない限り将来の仕官(雇用)をも禁止すること。

●片倉小十郎景綱家の受難・・・小早川家を舞台に政宗の懸想が発端

片倉小十郎父子は美男子の誉れ高い一家であったようだ。父・景綱は「智」の参謀として活躍し歴史小説で有名になった。その子・重綱は長身的美男子で「武」で活躍し、大坂夏の陣で片倉家に引き取った娘(後に真田幸村の娘・阿梅と判明した)を、後室(後妻)としたことで知られる。・・・佐藤の作成史料「真田幸村の実像と血脈」参照。

一方、小早川秀秋は、秀吉正室高台院の兄、木下家定の五男(秀吉の義理の甥)に生まれ、秀吉の養子になり羽柴秀俊。のち、毛利元就三男小早川隆景の養子となった小早川秀秋。中納言に出世し金吾中納言と呼ばれた。関ヶ原で徳川の東軍に寝返り岡山55万石藩主に就いたが、2年後の慶長7年(1602)21才の若年で没した。

○初代片倉景綱は、小早川家の客将浦山景綱というたいそうな美男子にほれ込んだ政宗によって、危うく交換人物として小早川秀俊(のちの秀秋)に差し出されそうになった逸話がある。

出典は不確かではあるが、火坂雅志著『臥竜の天』より引用。

“小早川家の客将に、浦山景綱というたいそうな美男子がいた。政宗は彼を一目見るなり、その美貌にほれこんでしまう。政宗は小早川秀俊に、「あの浦山景綱、ぜひ我が家に下さるか」とそれはもう熱心に頼みこんだ。秀俊もまた、男色には熱心な男である。

どうにか波風たてぬよう断ろうとこう返した。

「左様さなあ、景綱つながりでそちらの片倉景綱殿をくださるのであればよかろう」

「それはまことか！ よかろう、その条件のった」

秀俊はまさか政宗が股肱の臣である片倉景綱と衆道相手を天秤にかけるとなど思っていなかったのである。しかし今更断ることもできず、やむをえず承諾した。

政宗が片倉景綱にこの旨を告げると、彼は黙って聞いていた。景綱の胸にははるか昔の思い出が去来している。幼い主君の限度を超えたいたずらに堪えかね出奔を決意し、姉である喜多に説得されたときのことだ。

そのときより強烈な絶望感を彼はしずかに燃やしていた。

翌朝景綱は、「ついていけぬ」の一言のみを書き置きに残し出奔しようとしているところを見つかり、政宗のもとに引き戻された。ここに至って政宗は己の軽率さを悔やみ、この家臣交換は破談となった。秀秋が北ノ庄城主のときで、慶長3年頃のことであった。

のちにどうしたわけか、片倉景綱が小早川家に交換で異動することなく、浦山景綱は伊達家に仕官することとなる。彼は伊達家重臣・石母田家に婿入りして家督を継ぎ、石母田宗頼と名乗った。“

★石母田宗頼は、寛永5年(1628)我が故郷岩ヶ崎領の第三代領主になった(5400石)。子の定頼、孫の永頼と承応元年(1652)まで三代にわたり25年間岩ヶ崎を治めた。

○景綱の若かりし頃の出奔未遂事件

年代は不明であるが、以前にも景綱は一度伊達家を出奔しようと画策している。その理由については後世の推測でしか語られず不詳であるが、新参者の癖に政宗の父・輝宗近侍となったことに対する嫉妬や嫌がらせがひどく、とはいえ主君の傍らに侍る身にしてはあまりに微禄であり、身を立てるに忍びない窮地が続くならいっその事、と新天地を求めたとする説が主流である。わずかな家財道具を売り払って路銀に充て旅仕度を済ませた景綱だったが、姉・喜多(政宗の乳母)の説得により翻意し、以後は生まれ変わったつもりで奉公に邁進した。

景綱は此の頃、輝宗公の特命により政宗の教育係をしていた。隻眼に起因したと思われる人見知りで消極的な政宗の性格が直ったのは景綱の影響が大と伝わっている。

もし景綱が出奔していたら政宗の性格は治らず、母が溺愛する弟・小次郎が家督を継いでいたかも知れないと想像するのは、考えすぎであろうか。

●景綱の子・重綱、お前もか！・・・小早川秀秋の懸想に困惑し出奔

重綱はその美男子ぶりが小早川秀秋中納言によって懸想されて困惑した話が、『片倉代々記』に見える。慶長7年(1602)、重綱19歳、中納言21歳(没する直前)の出来事であった。原文は書き下し文。少しは読みやすいように自信はないが意識も加えて下記に記す。

“慶長7年7月 京都において金吾中納言殿が重綱の容色が美なるをご覧になり、恋慕して政宗公へ仰せになった、因て公より佐々善右衛門を使者に立て中納言殿へ早々参るべきよし(中納言の元へ出向き一度お会いして欲しい旨)催促したが、重綱之を聴かず、出奔して道書庵へ行て(意味不明)君命に従って中納言殿へ参るべきよし戒むる(再度説得)といえども、重綱敢て聞かず、又東福寺へ駆け入る、公より又 湯村信濃を以て重綱に御書を賜ふ、左の如し 善右衛門を以てコトハリ候(中納言殿へ断り)之事…………)”

*道書庵;文脈から片倉家ゆかりの施設で、出奔後先ずはここに逃げ込んだのか。
 なお、重綱はのち3代将軍家光の嗣子・家綱の諱字を避けて**重長**に改名した。

■補遺

●伊達成実出奔と屋城景頼の追放

屋城景頼は、文禄元年(1592)1月、政宗が朝鮮出兵参陣のため西上するに当たり、岩出山城留守居役を命ぜられ、景頼の下には富塚宗綱・布施定時らが評定人(補佐役)として付けられた。この後、政宗は文禄4年(1595)の一時帰国を除けば、慶長5年(1600)7月まで自領に戻ることを許されず、9年間にわたって留守居役の景頼に領国統治の全権が委ねられることとなった。このような時期に成実の出奔事件が起きた。

○NHKの大河ドラマ「独眼竜政宗」の放送で広まった事実と異なる屋代景頼像

高野山へと旅だった成実の出奔理由は、政宗にはわからない。彼は一歳下の弟のような家臣である。衝撃と怒りのあまり、政宗は彼の居城角田を召し上げ、その際、国家老だった屋代景頼に命じて抵抗した者を討ち果たす暴挙におよんだ。

成実はのちに伊達家に帰参したが、このとき政宗は成実家臣殲滅を景頼の独断とし、今度は屋代景頼を追放することとなる。景頼は流浪の末に近畿で倒れ果てた。……

○慶長12年(1607)1月5日、江戸に居た**屋代景頼**は改易の上、即日追放された。

『伊達治家記録』によれば、改易・追放に至った経緯は以下の通りである。

仙台藩士・成田一平の所領に年貢を納めない百姓がおり、一平はこの百姓をどのようにすべきかと景頼に相談したところ、景頼が「あなたの配下に付けられた者なのだから、存分に処分したらよいだろう」と答えたので、一平はこの百姓を斬殺した。この所領の元の知行主であった支倉紀伊がこの一件を上訴したところ、藩の正式な決定を経ずに私成敗を行ったのは不届きであるとして、一平は追放を申し渡された。ところが、景頼は家来の佐藤十郎右衛門に命じて自身の知行地である柴田郡入間田に一平を匿わせたため、これを知った政宗は景頼に対し速やかに一平を追放するよう再三注意したが、なおも景頼が従わなかったため政宗は勅使河原木工允に命じて一平を成敗させた。この日、前年の冬に一平が死亡したとの報が国許の中島宗求(一平の父)より届いたため、江戸で山岡重長・津田景康・大條実頼らによって屋代景頼への尋問が行われ、改易が決定した。

★その後の屋代景頼

①景頼はその日のうちに神田の寺へと立ち退き、翌日には江戸を離れて鎌倉へ向かった。当初越前北ノ庄藩主・結城秀康に景頼の妻の兄弟三人が仕えていた縁で召抱えられることになったが政宗の奉公構いにより破談となる。そのため秀康は近江高島藩主・佐久間安政に景頼を領内に住まわせてくれるよう依頼した。同年閏4月に秀康が急逝すると景頼は弔問のため北ノ庄城を訪れている。翌慶長13年(1608)に近江にて死去。享年46。

②**景頼の子・三郎兵衛**は成実に仕え、屋代氏は亘理伊達氏の家臣として明治に至るまで存続し、慶応4年(1868)の戊辰戦争の際には時の当主が出羽米沢藩主・上杉斉憲への使者を務めている。成実は己の軽率な行動ゆえ、景頼が災難にあったのだと罪悪感をいだき、彼はひ

そかに景頼の遺児を引き取り育て、のち家臣にしたのだという。亙理伊達の家臣名簿で確認。一方、仙台北藩においても、正保3年(1646)に第2代藩主・忠宗により、景頼の兄・源六郎重次(鹿股家養子)に200石が与えられて屋代氏の再興が許された。

幕末に編纂した『仙台藩世臣録』には鹿股の名が見えない。

●遠藤文七郎宗信の出奔

文禄元年(1592)の朝鮮出兵でも政宗に従い渡海し、武功を挙げたが、帰国後の報奨が少なかったことに不満を抱いて出奔し、一時伊達家を離れている。

のちに他の家臣に説得されて帰参している。

翌年、京都にて22歳で病没。遠藤家(政宗の宿老家)は、弟の遠藤玄信が継いだ。

■参考資料と引用

『伊達治家記録』 仙台藩史料大成シリーズ、平重道責任編集、宝文堂……漢字カナ交じり文

『伊達世臣家譜』 仙臺叢書シリーズ、田邊希文修纂、仙臺叢書刊行會……漢文

『茂庭家記録 綱元君記』 「松山町史」所収 ……漢字カナ交じり文

『成実記』 仙台叢書第3巻に収載。仙台叢書刊行会編集、宝文堂……書き下し文

『片倉代々記』 「白石市史4」所収 ……漢文

『仙台藩家臣録』 全5巻、佐々久監修、歴史図書社 ……書き下し文

茂庭綱元木像(石雲寺)



伊達成実像(市博)



片倉景綱像(市博)



政宗甲冑木像(瑞巖寺)

江戸期の作

